



子育てで大切なのは「評価の表現」です！

校長 田中 成志

■短い夏休みが終わりました(こんな表現、教師になって初めてです！)。

夏休み明けの8月18日に、久しぶりに子どもたちの顔を見ることができました。夏休みが短すぎて、さぞ元気がないだろうなあと感じていましたが、夏休み前と変わらない子どもたちの明るい笑顔を見ることができて、ちょっとほっとしています。妙典小の子どもたちの「ポジティブ・シンキング」に救われました。しかし、「危険な暑さ」はまだまだ続きます。新型コロナウイルス対策に加えて、熱中症対策も講じながら、子どもの安全を第一に考えて教育活動を進めていくつもりです。ご協力をお願いします。

今回は子育てについて…。

子育ての本や専門家の話の中には「子どもはほめて伸ばす」という子育て論が、今や当たり前のように語られています。この論理は間違いではありません。「ほめる」という行為が、子どもの自己肯定感を高め、自信を持たせ、何事にも積極的に取り組もうとする意欲を育てていくことは周知の事実です。

しかしほめ方次第では、子どもを追い詰める結果になることも知っておかなければなりません。大切なのは「何を評価し、それをどう伝えるか」という「評価の表現」です。ではどんな「評価の表現」が子どもを正しく成長させることができるのでしょうか…。

親が子どもを評価するときの基準は3つです。

ひとつは「Doing 評価」。これは、例えば「サッカーの試合で得点を決めた」「学校のテストで100点を取った」「買い物をしてくれた」「風呂掃除をしてくれた」…のような「行動」についての評価です。

2つめは「Having 評価」。「ピアノのコンテストで優勝した」「進学塾で1番の成績を取った」「有名大学に合格した」「学級委員になった」…など、子どもの属性や持ち物についての評価です。

3つめの評価は「Being 評価」です。「Being 評価」は、子どものありのままの存在を評価することです。「私はあなたが生まれてきてくれて、今生きていることだけでうれしいの！」という評価です。

実は「Doing 評価」や「Having 評価」には、「危険な落とし穴」があります。それは、ほめることで「そうでないあなたは愛せない」という逆のサインを発信してしまうことです。例えば、「今日の試合で決めたシュートはすごかったな。お父さんは鼻が高いよ」「ピアノコンクール優勝おめでとう！あなたは私の誇りよ」…こんな親の表現を、子どもは「シュートも決められないお前は愛せない」「準優勝のあなたは認めない」というマイナスの評価として受け取る危険があるのです。しかし、ほとんどの親が「Being 評価」で自分の子どもを見ているはずですが、にもかかわらず、「評価の表現」になると、たいてい「Doing 評価」や「Having 評価」になってしまいます。

保護者の方にお勧めしたいことは、評価の表現を「Being 評価」に変えていくことです。シュートを失敗しても、コンクールで優勝できなくても、有名大学に入れなくても、「あなたが生きただけで十分だよ」「今のあなたのままで十分だよ」と、ことあるごとに我が子に発信すべきです。「まだ持っていないもの考えるより、今持っているものを持っていなかった場合、どのくらい困っていたかについて考えたほうがいい」——これはロルフ・ドバリ氏が著書の中で述べた言葉ですが、「もしこの世に我が子がいなかったら…」と想像してみれば、きっと親の思いを素直に表現できるはずですが(因みに…夏休み中、山で行方不明になった子どもが次の日の朝に発見されたという事件がニュースで報じられました。発見された我が子を抱きしめて号泣するご両親の姿に涙したのは私だけでしょうか…)。

結論。子育てで大切なのは「ほめる」という行為そのものではなく、「何をほめ、どう伝えるか」という評価の表現。これは保護者だけではなく、教師、スポーツクラブのコーチ、地域指導者など、子どもの成長に関わるすべての大人が自覚しなければならない大原則だと思っています。

※参考文献 「学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に合格した話」 坪田信貴

「The clearly」 ロルフ・ドバリ